

図書館史研究会 ニュース・レター

第28号 昭和62年9月20日

* 昭和62年度の図書館史セミナーは、「東京の図書館—その功罪—」というテーマで、9月6日、7日の両日、東洋大学で実施した。参加者は44名であった。

* 「図書館史研究」 第四号のお知らせ

目次 特集 民主主義運動高揚期の図書館運動

自由民権運動と図書館 新井勝絃

1915(大正4)年における東京市立図書館の機構改革

とその成果について 清水正三

教育会図書館の発展過程に関する一考察 奥泉和久

戦後民衆図書館史(一) 中川路加

「第四回図書館史を考えるセミナー」

報告者 山口源治郎 宇治郷毅, 石塚栄二, 赤星隆子, 寺田光孝

セミナーでの総括討議

会員割引については、定価1,800円が1,280円になります。申し込み方法は、☎03-763-5241, または葉書(〒143 東京都大田区大森北1-23-8, 第3下川ビル, 日外アソシエーツ, 営業本部宛)で会員であることを明示して申し込んでください。なお、送料は冊数にかかわらず200円です。是非お買い求めください。

* 昭和61年度のセミナーについて、発表者のまとめと、討論の概要が上記「図書館史研究」第四号にでていますが、河井弘志氏の発表の報告は上記雑誌に掲載できませんでした。そのため、ニュースレターに、今回も含め2回連載にすることにしました。

運営委員会報告 9月6日(日)午後7時から8時まで、東洋大学で開催。出席は、宇治郷毅, 石井敦, 工藤一郎, 油井澄子, 是枝英子, 鮎沢修, 常盤繁, 山口源治郎, 川崎良孝, 阪田蓉子。おもに、「図書館史研究」の状況と、IFLAから要請されている国際的な図書館史研究者の名簿の件(別掲)について検討した。次回の運営委員会は、10月10日(土)夕刻から。

* IFLA図書館史ラウンド・テーブルからの名簿の件について。

前回のニュースレターで報告したように、名簿に記載する詳細がかなり事務量を伴うものであるため、さらに検討することになっていた。今年の夏のIFLAの大会に、阪田が出席し、直接担当者と話し合った。それによると、現在すでに、カナダ、デンマーク、マルタ、アメリカ、イギリス、オーストリア、ドイツ、オーストラリア、フランスなど、14か国の名簿が揃っているとの報告を得た。また、来年のIFLA大会にあわせて、とにかく第一版を出すという回答もえた。以上のことを踏まえ、当研究会として、この企画に協力することを、再度運営委員会で確認するとともに、当研究会の事務局の能力に合う範囲で最善を尽くすことにした。

同封の葉書に以下の要領で記入し、返送していただくと幸いです。

- ① 氏名、事務局のほうでは読み方がわかりませんので、すべてローマナイズして下さい。
- ② 所属・職位。所属については、英語あるいはローマナイズをお願いします。職位については、英語あるいは日本語いずれでも結構ですが、できるだけ英語で、お願いします。
- ③ 所属先住所 すべてローマナイズして下さい。
- ④ 興味分野 英語でも日本語でも結構ですが、できるだけ英語で、お願いします。

以上①から④までは、最低限、必要な事項です。⑤はオプションです。

- ⑤ その他 図書館史についての、各自の論文、単行書を記入して下さい。点数は最大限三点まで。

「図書館学会年報」「図書館界」はじめとして、英文のタイトルが付いているものについては、なるべくそのタイトルを記入して下さい。また、発行年、発行所、発行地、巻数、ページなど論文の引用で示す要領で、記入して下さい。

単行書、その他、英文のタイトルがない場合、もちろん英文タイトルをつけていただくとありがたいですが、日本語のままでも事務局の方で、翻訳します。

注意 日本語で書かれたものについては、阪田と川崎が翻訳します。当該会員の期待にそえる訳ができるかどうかわかりませんが、日本語で記入される方は、両者に御一任くださいますよう。

締切 10月20日(必着)

(文責 川崎 良孝)

ケークバイン (Paul Kaegbein)の研究によって明らかにされたように、ドイツの公立図書館の歴史は、14世紀の東方ハンザ自由都市に現われた参事会図書館 (Ratsbibliothek) までさかのぼる。¹⁾ しかしそこにはまだ、近代公立図書館を支える幅広い利用者が存在しなかった。カールシュテットによれば、16世紀の宗教改革によってようやく一般民衆の読書要求が形成されたという。²⁾ けれども実際には、参事会図書館の利用者は上層教養市民にかぎられていた。一般民衆に利用される、公費経営、公開、無料の、英米型近代公立図書館が成立したのは、英米と同様、19世紀中葉であり、しかもそれには英米の図書館思想の影響があった。

チャプラン (Margaret Chaplan) は、ドイツ公立図書館史には、アメリカから強い影響を受けた3つの時期があったという。第一期は19世紀中葉のラウマーによるアメリカ思想の導入、第二期は、19世紀末の図書室運動 (Buecherhallenbewegung)、そして第三期は第二次世界大戦後のアメリカ記念図書館 (Amerika-Gedenkbibliothek) 設立である。³⁾ 今われわれが問題にしているのは、この第一期のアメリカ思想導入であるが、影響力の範囲を英米に拡大すると、これよりも少しさかのぼる必要がある。

いっぼうラングフェルト (Johannes Langfeldt)、ミルプト (Karl-Wolfgang Mirbt)、タウアー (Wolfgang Thauer) らの書いたドイツ公立図書館史によると、近代公立図書館思想史は、シュテファアーニ (Heinrich Stephani, 1761-1850) とフォン・マッソウ (Julius Eberhard Wilhelm Ernst von Massow, 1750-1816) をもって始まったとされている。彼らは国民啓蒙の一手段として、読書と公立図書館サービスの意義を評価し、国民教育制度のなかに公立図書館を位置付けたが、その思想的背景にはフランス革命の国民教育思想が存在したという。⁴⁾

これらの諸説を参考にしながら、筆者はここでは、英米の直接的影響に限定して考えるために、プロイスカーとラウマーという2人の開拓者の公立図書館観への英米思想の影響を考察することにしたい。

K. B. プロイスカー (Karl Benjamin Preusker, 1786-1871)

ザクセン王国のオーベルラウニッツ地方出身のプロイスカーの家庭は、平凡な亜麻

織工であったが、父親は布地の行商をはじめ、西はフランクフルト・アム・マインまで幅広く商売し、かなりの産をなした、立身出世型の人物であった。資本主義の発達のおくれたドイツの当時に典型的にみられた、問屋制家内工業式の事業家・資本家といえよう。⁵⁾ シュラーデバッハのつぎの記述をみると、マックス・ウェーバーのいわゆるプロテスタント近代資本家のタイプをも思わせるものがある。

「簡素な生計、素朴な信心、実直な善行、休むことをしらない勤勉が、当りまえのことになっていた。」⁶⁾

しかしプロイスカーは父業を継ぐことを好まず、ライプツィヒ、ブラウンシュヴァイクに出て書店に勤務、とくに後者のカンペ書店では、人道主義者の店主のおこなう読書会に加わり、読書・書評活動に励み、これが彼の一生を決定することになった。ナポレオン戦争がはじまるとザクセン軍に身を投じてフランスに行き、占領地リールでも読書会 (lesezirkel) を行った。⁷⁾ 1817年に除隊してザクセンに帰ると、グローセンハインに王宮会計官の職を得た。本務は王料地の地代徴収などであったが、寡婦・孤児扶助金庫を開設して、公益事業もすすめた。

この頃、イギリスのベンサム主義者であり、パークベックの友人であった政治家ブルーム (Henry Brougham, 1778-1868) の書いた労働者教育論『人々の教育についての実際の考察』が独訳された。⁸⁾ 本書を読んで啓発されたプロイスカーは、ザクセン総合技術協会 (Polytechnischer Verein fuer Sachsen) の地区支部長に選ばれたのを機に、新聞や雑誌に投稿して、労働者教育の必要を訴えた。1829年には、工場主、仲買人、聖職者、騎士領主、職人などの支援を得て、日曜学校 (Sonntagsschule) 開設を実現した。⁹⁾

一方、1828年10月に、ライニガー (D. Emil Reiniger) の提唱により、地域の有識者が協力して図書館設立の計画がおこされ、プロイスカー、副校長、市議員など多くの人々の寄付に支援されて、市立学校の2階に学校図書館 (Schul-Bibliothek) が設置された。運営のために9人の委員がおかれ、プロイスカーもその一人として議事録作成、目録作成などの任務にあたった。当初その蔵書は寄贈書132冊、週一回1時間開館され、利用は無料であった。4年後には蔵書は780冊にふえたが、貸出しは400冊にとどまった。¹⁰⁾

プロイスカーはこれに満足せず、1833年に市立図書館 (Stadtbibliothek) に昇格させた。とはいえ当初は市は全然金を出さず、財政支出するようになったのは18

50年代に入ってからのことである。したがって蔵書は寄贈によって増加するだけで、図書館業務も奉仕労働によらざるをえなかった。図書館は毎日曜日 14:00-15:00に開館、毎回20-30冊の貸出しをみた。¹¹⁾ そののちプロイスカーは一時閲覧料 (Lesegeld) を取ったが、利用が減少したために再び無料制に復した。1851年には蔵書は3000冊、貸出しも4781冊をかぞえた。¹²⁾

プロイスカーの市立図書館はザクセン全域に知れわたった。彼自身も普及のために公共図書館論を執筆した。これが Ueber oeffentliche, Vereins-, und Privat-Bibliotheken, so wie andere Sammlungen, Lesezirkel und verwandte Gegenstaende, mit Ruecksicht auf den Buergerstand; usw. 2 Bde. (Leipzig: Hinrichs, 1839-40) である。本書の出版にはザクセン政府から出版費補助がだされ、またプロイセン大臣アルテンシュタインも本書を紹介、郡会をつうじて各市参事会に読ませるよう勧奨した。¹³⁾ その第1巻が市立図書館論 Ueber Stadt-Bibliotheken fuer den Buergerstand, deren Nuetzlichkeit, Gruendungs- und Aufstellungsart, usw. である。

プロイスカーのいう市立図書館 (Stadtbibliothek) とは、

「市の住民の大多数 (すくなくとも図書を利用する教養人) が、無料で利用するために設けられた蔵書」¹⁴⁾

である。すなわち、自治体によって設立経営される、無料、公開の図書館である。ここには公共財源の支出については何ものべられていないが、それは当時のグローゼンハイン市立図書館がまだ公費支出をうけていなかったためであろう。いっぽう、市立図書館の財源の項では、基金の金利 (Zinsen)、国庫補助 (Staatszuschuss)、自治体補助 (Zuschuss von Gemeindecasse)、法人・団体の寄付 (Beitraege)、個人寄付などをあげている。¹⁵⁾ これにたいして、閲覧料 (Lesegebuehren) については「いかなることがあっても、市立図書館が個々の図書にたいして閲覧料を求めることは許されないように思われる」と、厳しく排除している。なぜなら、閲覧料は市立図書館を「普通の貸本屋に墮落させてしまう」し、金のない人達から読書の機会を奪うことになるからである。強いてとるとすれば、金のある利用者から、自由意志で、しかも年会費 (Subskription) を納入させればよい。¹⁶⁾ ここには公費経営、無料利用の原則が確立されていると述べている。

彼はまた、「公立図書館」の「2つの利点」として、良書を選ぶことにより、貸本屋による悪書普及の害悪を防ぐこと、および、無料で図書を提供して、財産のない人

達にも職業や生活に役立つ読書の機会を与えること、をあげている。¹⁷⁾ 公立図書館が、貸本屋の提供する低俗書の害を防ぐ機能をはたすという期待は、どの国でもみられた。これは公共機関による民衆啓蒙の思想といえよう。下層民衆に無料の読書施設をとという思想は、彼が寡婦・孤児扶助金庫を設立したと無縁ではあるまい。

ところで、プロイスカーの眼を成人教育へと転じさせたイギリス人ブルームは、前記の著書において、労働者教育の重要性を説き、労働者にも購入して読める、安価でわかりやすい図書の出版の促進、教区図書館、農民図書館、巡回図書館の設立、読書会・討論会の開催、労働者を対象とする講義の開講、そのための教育館の開設、職工学校の設立、などを訴えた。しかし彼はこれらを公立機関として考えたのではない。労働者達が読書や講義から受けるものの大切さを自覚するために「その計画によって利益を得る人々によって支払われることが、絶対に必要である」という。¹⁸⁾ これはむしろ彼の尊敬してやまなかったフランクリンが作った団体図書館に通ずる思想であり、無料制の理念もここにはない。

プロイスカーに影響を及ぼしたもう一人の人、シュテファーニは、「公教育」(oeffentliche Erziehung)の一端として「国家公務員図書館」「市立図書館」「村立図書館」の3種の「公立図書館」(oeffentliche Bibliothek)の設立をもとめて、公立の教育機関という側面を強調したが、無料の原則は特に示されていないようである。¹⁹⁾ シュテファーニの影響もそれほど大きいものであったとは考えられない。

しからばこの3者に共通するものは何か。それは、社会の上層ではなく、下層の民衆、労働者階級に読書の機会を提供しなければならないという、使命感である。ブルームとシュテファーニが、下層民衆の教育・啓蒙を主要課題としたことは、あらためていうまでもない。プロイスカーは、プロイセンの伝統的な Stadtbibliothek が学者・教養市民のためのものであったのにたいして、これからは職工や労働者が利用できる図書館こそ必要であることを説いた。²⁰⁾ この一般民衆への読書の機会の提供こそ、近代公立図書館の重要な特性であり、プロイスカーは特にブルームからその思想を受け継いだのである。移動図書館に関する論述の脚註にブルームの *itinerating librarie* 論を参照したのもその一である。²¹⁾

しかし彼らは、ただひたすら民衆のためののみを考えて、彼らの読書の条件を整備しようとしたのではなかった。ブルームは1819年の「知識弾圧法」にたいするジョン・ラッセルの抗議を引用しながら、「他のあらゆる著作と同じように、政治的著作

が、安価な形で、また分冊で、出版されてはなぜいけないのか」と問いかけ、「人々がこれらの〔政治経済上の〕議論に参加するのをみとめること、あるいはむしろ参加させることは、社会にとって安全であるだけでなく、もっとも有益である」と、労働者が政治にかんする図書を読むことを、積極的に認めている。²²⁾ 資本の力によって労働者を取奪し、労働者の反抗は権力によって弾圧しようとする初期資本主義の労務管理法とはちがって、労働者をも十分に啓蒙教育し、資本家にたいして理性的に対処する労働階級に変えようとする、高度資本主義的労務管理の意図が、ここには読みとれる。読書クラブの結成を勧める項で、クラブが反権力運動を引き起こすのを警戒して、クラブのメンバーには「不穏な人はだれも認められない」と釘をさしたのも、そのためである。²³⁾ ベンサム主義者、Philosophic Radicals と呼ばれたブルームの後継者たちが、Public Libraries Act 制定運動の過程で、公立図書館を作れば、「最も安い警察を提供する」ことになると証言したことは、周知の事実である。こうした見解が、機械破壊運動やチャーチスト運動を契機として形成されたことも、饒舌するまでもない。

プロイスカーによれば、無知、粗野、貧困は、不道德、犯罪、公共の秩序をみだすもとになる。²⁴⁾ 大衆の貧困化がすすみ、公共の治安 (oeffentliche Sicherheit) が危険にさらされてきたので、民衆の公德心を養って、社会秩序を維持しなければならない。²⁵⁾ 下層民 (nidrige Staende) に読書を普及するのは、国にとって損失である、とする意見もあるが、それは誤っている。「真の図書普及と真の啓蒙は相たずさえて進むものである」。公立図書館で良書を厳選して提供すれば、貸本屋の貸与する低俗な図書のおよぼす悪影響をふせぐこともできるし、「消化不良の政治パンフレットに手を出す」こともなくなるであろう。²⁶⁾ プロイスカーが本書第2巻を刊行して4年後に、グローセンハインを含むシュレジエン地方に、ドイツ労働運動史最初の大規模な織工一揆が発生し、紡績工やサラサ織工が問屋の倉庫、邸宅、ワインケラーを襲撃破壊し、ザクセンの軍隊が出動し、11名殺害、100名逮捕となってようやく終結するという事態が起こったことを考慮すると、上にみたようなプロイスカーの思想を生んだ土壌を理解することができるであろう。²⁷⁾

公立図書館や読書普及を治安維持手段とみなすこれらの思想は、19世紀中葉の各国の公立図書館運動に共通する思想であるが、この共通性を、たとえばブルームの思想をプロイスカーがとりいれたという、思想伝播の結果と解釈するのが正しいかどうか

かはわからない。筆者はむしろ、各国の資本主義に共通する社会状況が存在し、その対策が強く求められているとき、ここにみるような思想家達がそれぞれ萌芽的にこのような思想を抱懐し、著作を通じて相互に確認しあった過程と考えるべきではないかとおもう。

註

1. Kaegbein, Paul. Deutsche Ratsbuechereien bis zuur Reformation. Leipzig: Harrassowitz, 1950.(Zentralblatt fuer Bibliothekswesen, Beiheft; 77)
2. カルシュテット, ベーター. 『図書館社会学』 東京 日本図書館協会 1980 pp.17-8
3. Chaplan, Margaret. "American Ideas in the German Public Library : three Periods". Lib. Q. 41(1) 1971, pp.35-53.
4. Rubach, Christel. Die Volksbuecherei als Bildungsbuecherei in der Theorie der Deutschen Buecherhallenbewegung. Koeln: Greven, 1962. S.4.
Cf. Langfeldt, Johannes. "Zur Geschichte des Buechereiwesens". Handbuch des Buchereiwesens, 1. Halbband. Hrsg. v. J.Langfeldt.Wiesbaden: Harrassowitz,1961.
Mirbt, Karl-Wolfgang, zusammengest. Pioniere des oeffentlichen Bibliothekswesens. Wiesbaden: Harrassowitz, 1969.
Thauer, Wolfgang & Peter Vodosek. Geschichte der oeffentlichen Buecherei in Deutschland. Wiesbaden: Harrassowitz, 1978.
5. Langfeldt, op. cit. S.240.
Schladebach, Betty. Karl Preuskers Bestrebungen fuer freie Volksbildung. (Universität Leipzig, Philosophische Fakultät, Dissertation, 1921)
6. Schladebach, op. cit. S. 21.
7. Langfeldt, op. cit. SS. 240-1.
8. Ibid. S.241.
Brougham, Henry. Practical Observations upon the Education of the People, addressed to the Working Classes and their Employers. London, 1825.
Brougham, Henry. Praktische Bemerkungen ueber die Ausbildung der gewerbetreibenden Classen : an die Handwerker und Fabrikanten gerichtet. Berlin, 1827.
ラルム, アンリ 「人々の教育についての 実際の観察 労働諸階級とその雇用者たちへの呼びかけ」
『イギリス民衆教育論』ラヴェット 他 東京 明治図書 1970(世界教育学選集) pp.115-161
9. Langfeldt, op. cit. S.241.
10. Ibid., SS. 243-244, f.n.
11. Preusker, Karl Benjamin. Ueber Stadtbibliotheken fuer den Buergerstand,

deren Nuetzlichkeit, Gruendungs- und Aufstellungsart, damit zu verbindende Sammlungen und Orts-Jahrbuecher. Leipzig: Hinrichs, 1839, SS. 15-6, Anmerkung.

12. Langfeldt, op. cit. S.245.

13. Ibid., S.244.

14. Preusker, op. cit. S.1.

15. Ibid. SS. 20-23.

16. Ibid. S.23.

17. Ibid. SS. 4-5.

18. フルム 前掲書 pp.131-2, et al.

19. Stephani, Heinrich. "Aus dem Grundriss der Staatserziehungs-Wissenschaft" und "Aus dem Aystem der oeffentlichen Erziehung". Pioniere des oeffentlichen Bibliothekswesens, zusammengest. v. K.W.Mirbt. SS.23-25, 36-45.

筆者はこの抜粋しかみていないので、シュテファーニの思想全体はわからない。

20. Mirbt, op.cit. S.14.

21. Preusker, K.B. Ueber Vereins-, Schul-, Dorf- und Privat-Bibliotheken, wissenschaftliche Sammlungen, Lesezirkel-Einrichtung und verwandte Gegenstaende. Leipzig: Hinrichs, 1840.(Ueber oeffentliche, Vereins- und Privat-Bibliotheken, so wie andere Sammlungen, usw.; 2. Heft) SS. 93-4.

22. フルム 前掲書 p. 122.

23. 同書 p.128.

24. Preusker, Ueber Vereins-, Schul-, Dorf- und Privat-Bibliotheken, S.8.

25. Ibid. S.16. Cf. Ibid. SS. 132-3.

26. Preusker, Ueber Stadt-Bibliotheken, SS.5-6.

27. Faber, Karl-Georg. Deutsche Geschichte im 19. Jahrhundert: Restauration und Revolution von 1815 bis 1851. Wiesbaden: Akademische Vewlagsgesellschaft Athenaion, 1979. S.206.

Hardtwig, Wolfgang. Vormaerz: der monarchische Staat und das Buerkertum. Muenchen: Deutscher Taschenbuch Verl., 1985. SS. 27-32.